

自然、人種、ジェンダー—ウィリアム・フォークナー『行け、モーセ』論（1）

大野 真

<序>

本論考では、ウィリアム・フォークナーの長編小説『行け、モーセ *Go Down, Moses*』（1942年）を扱う。『行け、モーセ』は7つの中・短編小説（「昔あった話」、「火と暖炉」、「黒衣の道化師」、「昔の人たち」、「熊」、「デルタの秋」、「行け、モーセ」）から成る。筆者は、これまでにフォークナー作品の持つ表層と深層の2層的構造に注目してきたが¹、その観点からも『行け、モーセ』は興味深い構成を有する。つまり、7つの中・短編小説が各々独自の2層的構造を持ち、それぞれ角度を変えながら、アメリカ南部社会の人種や性などの主題を徐々に提示していくのであり、7つの連作全体を通して見た場合に、いわば重層化された2層的構造を持っているのである。また、人種や性の問題とも絡める形で自然と人為の主題が扱われており、エコロジーの観点からも興味深い作品だ。

以下の本論においては、7つの中・短編小説を配列された順序に従って各々考察していきたい。

<1. 「昔あった話」>

最初に置かれた短編小説「昔あった話 Was」は、一見したところ喜劇的な調子で描かれた、のどかな南部の過去の時代の或る出来事についての懐古談である。

アンクル・バックとバディという兄弟の所有する黒人奴隷であるトミーズ・タールが、恋人である少女テニーに会うために逃亡する。テニーはヒューバート・ビーチャムの所有する奴隷であり、トミーズ・タールはテニーのいるヒューバートの地所へと向かったのである。バックとバディはトミーズ・タールを追いかけてヒューバートの所へ行き、ヒューバートとのポーカーゲームなどの勝負を経て、結局、バックはヒューバートの妹のソフォンシバと結婚し、トミーズ・タールも恋人テニーと結ばれる。

この短編は南部の奴隷制社会を背景にしており、逃げ出した奴隷を所有者たちが追いかけるという「人間狩り」を物語の背景にしている。しかし、この短編の全体の調子は暗いものではなく、むしろ明るく喜劇的なものである。物語の結末は、結局、バックとソフォンシバ、トミーズ・タールとテニーという2つのカップルが結ばれる形で締めくくられるのであり、一種の愉快的な結婚談であるともいえる。また、逃げた奴隷を追いかけるという主題も、この物語の場合では、逃げる側も追いかける側もそれを一種の追いかけてこのゲームとして演じている印象を読者に与える。それまでも何度かトミーズ・タールは恋人のテニーに会うために逃げ出している（5）、逃亡劇はお定まりの儀式のような行為であり、追う側もその前にゆっくりと食事をしたり酒を飲んだりという具合で、緊迫性が感じられない。最後のトランプのポーカーの場面では、逃げていたトミーズ・タールが何食わぬ顔でその場に現れたりもする（26）。また、ポーカーというゲームが行われること自体が、この物語の持つゲーム的性格の象徴であると言えよう。

こうした喜劇的調子を生み出すのに大きな役割を演じているのが、少年の視点による回想談とい

う視点と語りの技法である。この物語は、マッキヤスリン・エドモンズという男性が、懐かしい過去の時代の出来事を、その当時に自分が少年であった視点から語ったものなのである。物語のタイトルは「昔あった話 Was」というものであり、懐古談におけるノスタルジアが全体の喜劇的調子を支えている。

しかし、この短編の表面上の喜劇的雰囲気やノスタルジアの深層には、南部の奴隷制の問題やその制度がもたらす深刻な悲劇が横たわっていることを見落としてはならない。「人間狩り」の対象である黒人奴隷トミーズ・タールには、実は白人の血が混ざっている。後続する中編の「熊」で明かされるように、バックとバディの父親であるルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンは、黒人奴隷の女性との間に娘をもうけ、しかもさらに、その娘と近親相姦の罪を犯した結果として生まれたのがトミーズ・タールなのである。そのため、バックとバディがトミーズ・タールを追うことは、いわば、白人たちが自分の兄弟である黒人を狩る行為となっているのだ。

また、この短編の冒頭には、語り手のマッキヤスリン・エドモンズの血縁であり、バックとソフォンシバの息子であるアイザック [アイク]・マッキヤスリンについての言及がある。

アイクは現在 80 歳近い年齢で、20 年間やもめとして粗末な平屋建ての家に暮らしている(3—4)。「……なぜなら彼は森を愛していたからだ。彼は財産を全く所有せず (owned no property)、所有しようとも決して欲しなかった。なぜなら、光や空気や天気と同じように、大地は誰のものでもなく万人のものだからだ (since the earth was no man's but all men's) ……」(4)。後の「熊」において明かされるように、アイクは自分の祖父であるルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンの罪を知り、農園の相続権を放棄したのである。

しかし、こうした南部奴隷制の問題やそれにまつわる悲劇といった深層部については、この短編ではわずかに暗示されるだけで、全体としては回想形式によるノスタルジアや少年の限定された視点によって被い隠されており、表面上は喜劇的な結婚談となっている。つまり、深層部における悲劇がノスタルジアによって偽装・転調されて、表面上の喜劇となるのである。「転調・偽装としてのノスタルジア」が「昔あった話」と題されたこの短編の特徴だ。

なお、表層と深層の 2 層的構造の他に、「円」のイメージからも、この短編あるいは連作全体の構成を考えることができる。つまり、円の中心には人種問題にまつわる悲劇があり、その周囲を懐古的な喜劇が包んでいると解釈するのである。フォークナーは、『行け、モーセ』という連作全体を通じて人種問題の悲劇を追求していくのであるが、その問題をいきなり直接的に読者に対して提示することはしない。そうではなくて、連作の冒頭に置かれたこの短編では、人種問題という中心の核の周囲を喜劇のオブラートで包みこんだ上で、最初のうちは悲劇的本質を暗示するにとどめておいて、この後の連作において徐々に中心的問題の謎に迫っていく。そうした遠回りをすることによって、連作全体に謎めいた雰囲気、いわば推理小説的なサスペンスが生じるのだ。

「昔あった話」の「円」的イメージは、フォークナーが人種問題を描く際の迂回的方法を示すものである。

< 2. 「火と暖炉」 >

第 2 話の「火と暖炉 The Fire and the Hearth」において描かれているのは、「昔あった話」の

中で結ばれたトミーズ・タールとテニーの息子であるルーカス・ビーチャムとその妻モリーという黒人夫妻にまつわる話である。ルーカスは 67 歳であるが、住んでいる土地に埋もれているという伝説のある埋蔵金探しに夢中になってしまい、長年連れ添った妻のモリーが離婚を考えるようにさえなるが、結局はルーカスが埋蔵金探しをあきらめて夫婦の危機は去る。こうした黒人夫婦の現在の物語に絡めるようにして、農園の領主である白人エドモンズ家との関係が過去の記憶の挿入を通じて探求されていくのである。

「火と暖炉」においては、白人の家系と黒人の家系との対比が描かれている。白人の家系を代表するのが、現在の農園領主であるエドモンズ家であり、黒人の家系を表す人物が、ルーカス・ビーチャムである。ここで注意すべきは、両者ともにルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキャスリンという共通の祖先をもつことだ。白人のエドモンズ家は、ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキャスリンの娘から引き継がれた女系の系統であり、他方、ルーカス・ビーチャムは、ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキャスリンが黒人奴隷の女性との間にもうけた娘とさらに近親相姦をした結果として生まれたトミーズ・タールの息子であり、男系の系統である。ルーカス・ビーチャムが純粋な黒人ではなく、白人荘園領主の先祖の血が混じっていること、さらに男系の系統であることが、白人だが女系であるエドモンズ家の人間たちのルーカスに対する態度を複雑なものにしている。

つまり、白人だが女系であるエドモンズ家の人間にとって、黒人だが白人の先祖の男系の血を引くルーカスは、何かしらコンプレックスを感じさせる存在なのである。例えば、現在の領主であるロスは、少年の時に、父親のザックから、「自分たち [エドモンズ家の人間] は [この土地の] 横領者だ we Edmonds are usurpers」と言われ、その言葉にショックを受けて、「自分たちは横領者ではない We're not usurpers」とほとんど泣き叫ぶように言い返した苦い経験を持つ (111)。エドモンズ家はルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキャスリンの女系の血を引いているので、農園の正当な後継者ではないのではないかと感じてしまうのである。黒人であるがルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキャスリンの男系の血を引くルーカスは、そうしたエドモンズ家の引け目の感情を刺激する存在なのだ。ルーカスは黒人と白人という単純な 2 項対立的な図式に収まらず、黒人と白人との人種混淆によって 2 項対立を攪乱したり、あるいは男系と女系という別の枠組みを絡ませたりした複雑な存在である。ルーカスは、黒人と白人という単純な 2 項対立の秩序に収まらない存在、秩序をかき乱してシステムを不安定にさせる存在なのだ。

さらに、この短編を「時間」の観点から検討してみたい。「火と暖炉」において注目されるのは、現在の出来事を物語る中で、過去の記憶が大幅に挿入されることである。あるいは、現在の語りの中に過去の記憶が侵入すると言ってもいい。物語の表層と深層という 2 層的構造との関連で言えば、表層が現在の出来事で深層が過去の記憶なのであるが、深層の記憶が表層の現在時にしばしば侵入して秩序をかき乱すという、不安定な構造を持っている。

このように過去の記憶が侵入してくる原因は、登場人物たちにとって、過去が解決のつかないものだからである。したがって、過去の記憶の内容を検討することによって、登場人物たちの深層心理のコンプレックスを探ることができる。

「火と暖炉」での過去の記憶の大幅な侵入は、具体的には第 1 章と第 3 章とで描かれる。第 1 章

での過去の記憶は、ルーカスの妻モリーがエドモンズ家での出産の手助けをし、主人のザック・エドモンズの妻が出産の際に死亡したために、モリーがエドモンズ家に残って赤ん坊〔ロス・エドモンズ〕の世話をすることになり、妻を返してほしいと願ったルーカスが、ザック・エドモンズと対決する出来事である。ここではモリーという1人の黒人女性を巡って、夫の黒人ルーカスと農園領主の白人ザック・エドモンズが対立するのだが、ルーカスとザックは子供時代には「同じ毛布の下に」寝たりして(54)、兄弟あるいはほとんど「双子 twins」(46)のようにして育った間柄だったのだ。

また、第3章における過去の記憶では、少年時代のロス・エドモンズが、黒人のモリーを母親代わりの乳母として成長し、ルーカスとモリーの息子の黒人少年ヘンリーと「同じ寝床で」眠り「同じ食卓で同じ食事を食べて」(107)兄弟のようにして過ごすのが、成長していくにつれて白人の自分と黒人との違いを意識するようになり、7歳の時の或る日、ヘンリーと一緒に寝床で寝るのを拒絶するようになる過程が述べられている(108)。第1章の記憶で言及された、ザック・エドモンズとルーカスの少年時代における白人と黒人の兄弟のような関係は、第3章の記憶では、次の世代の少年たちであるロス・エドモンズとヘンリーにおいて反復される。白人と黒人は、いわば兄弟のような分身同士なのである。しかし、ロス・エドモンズがヘンリーと一緒に寝床で寝るのを拒むようになったように、白人少年の成長過程において、人種の隔たりに対する意識が高まり、自らの分身である黒人と離別する時がやってくる。つまり、白人が成人になる過程において、自己の分身としての黒人にまつわる記憶を自らの精神の深層に抑圧することが必要であり、それによって成人の白人の自我が形成されていくのである。だが、こうした抑圧は不完全なものであって、抑圧した黒人のイメージは反復して回帰し、成人白人の精神を不安定にさせる。

「火と暖炉」における現在と過去との2層的構造は、白人と黒人との2層的構造とも読みかえることが可能であり、白人にとって、黒人にまつわる人種問題が、自らの精神の深層部と関連するような未解決の問題であることを示唆している。

< 3. 「黒衣の道化師」 >

「火と暖炉」に続く第3話「黒衣の道化師 *Pantaloon in Black*」では、黒人青年ライダーが愛妻のマニーの死によって自暴自棄となり、酒に酔ったあげく、白人のいかさま賭博に怒ってその白人を剃刀で殺してしまい、そのためにリンチを受けて死に至る過程が描かれている。

この短編を2層的構造の観点から考えてみると、表層上にあるのはライダーの飲酒や暴力・殺人といった表向きのいわば凶暴な行動であり、深層に秘められているのはライダーの人間的感情、つまり妻を失った悲しみや夫婦間の愛である。

ここで問題となるのは、黒人ライダーの人間的感情が、上手く表現されずに歪まされてしまい、表面上は飲酒、暴力・殺人といった野蛮な行為になってしまうことである。

こうした歪みがとくに表されているのは、この短編の後半部〔第2節〕における白人の視点である。ライダーが殺人を犯した後にリンチを受けて死に至る過程は、白人の郡保安官代理が自分の妻に対して物語る形で描かれている。しかし、結局のところ、白人の郡保安官代理は、愛妻を失ったライダーの深い悲しみを理解することができず、「連中[黒人たち]は人間じゃねえからだ Because

they aint human」(149) という理由づけをして、表面上のライダーの暴力的行為を説明しようとする。つまり、白人側の視点という枠組みを通じた場合に、黒人の人間的感情という深層は歪まされてしまい、黒人は非人間的な存在と解釈されてしまうのである。

白人側の視点とは、白人優位の社会システムと言い換えることもできるだろう。

ライダーは妻の埋葬から帰った後に、夕暮れ (dusk) 時の自宅で台所のドアの所に立って自分を見つめている亡き妻の亡霊を目撃する (136)。この亡霊が果たして現実なのか幻覚なのかはさておき、亡霊は現世とのずれを表すのであって、現世の社会システムにおいては歪まされてしまう黒人の人間的感情の象徴になっている。

なお、ナンシー・B・セイダバーグは、哲学者アンリ・ベルクソンの笑いに関する理論を基にして、『行け、モーセ』の喜劇的要素を分析しているが、その際とくに「黒衣の道化師」の最後の場面に注目している。その場面では、ライダーが大粒の涙を浮かべつつ笑い続けて、「どうやら俺はどうしても考えずにはいられねえんだ Hit look lack Ah just cant quit thinking」と言うのである (154)。ライダーは胸中の深い思いを上手く言葉で表現できないために奇怪な笑い声を上げ続ける機械のような印象を読者に与える。それに対してセイダバーグは、「ここでの喜劇は、『人間の身体が単なる機械を思い起こさせる程度に正に应じて、人間の身体の態度や身振りや動きは笑うべきものになる』というベルクソンの見解の好例になっている」と評している (85)。ベルクソンは、人間精神が現代社会において歪まされて機械化する事態を問題にした哲学者であるが、ライダーの場合では、そうした歪みが、白人優位の社会において黒人であるということと関連している。

「黒衣の道化師」では、「火と暖炉」において描かれた黒人の夫婦愛が歪まされた形で描き直されていると言えるだろう。

< 4. 「昔の人たち」 >

「昔の人たち The Old People」で語られているのは、「昔あった話」で名前が言及されたアイザック [アイク]・マッキヤスリンの少年時代における森の中での狩猟体験である。アイク少年は12歳の時に、サム・ファザーズという男に命じられて雄鹿を撃つ。サム・ファザーズはその際に鹿の血でアイク少年の顔面を塗る一種の儀式を行う。この儀式によって、「彼 [アイク] は子供であることをやめて、ハンターに、そして男 (a man) になった」のである (171)。サム・ファザーズは当時70歳過ぎて、ネイティヴ・アメリカンの酋長の父親と4分の1黒人の奴隷の母親との間に生まれた男である (159-60)。

「昔の人たち」で描かれているのは、サム・ファザーズによる、アイク少年に対する森の中での教育の過程である。そこにおいて、“the wilderness” (174) という言葉で表されている「自然」が姿を現わす。

この短編を2層的構造の観点から考えてみると、表層はアイク少年の現在であり、それを支えている深層は、サム・ファザーズによって代表される「昔の人たち the old people」のいた過去であると言えるだろう。この場合の過去とは、アイク個人の過去よりも大きな広がりを持ち、サム・ファザーズがその血を引いているネイティヴ・アメリカンの世界へと通じている。ここで、サム・ファザーズについて、「70歳過ぎの老人で、その祖父たちは白人たちがこの土地を目撃するはるか以

前にこの土地を所有していた」と描かれており(159)、ネイティブ・アメリカンは土地の本来の持ち主として位置づけられている。つまり、この作品で描かれている森とは、白人の進出以前の未開地(wilderness)を表すのである。

この物語において、サム・ファザーズはアイク少年に対して、狩人となるための教育を行う。アイクが鹿を撃ち、サム・ファザーズが鹿の血でアイクの顔を塗る儀式を行うことによって、アイクは一人前の男の狩人となる。サム・ファザーズがアイク少年に教育を行うことを通じて、過去は現在へと受け継がれていき、いわば過去は現在となる。(「……徐々に少年にとって、こうした古の時代は古い時代ではなくなり、少年の現在の一部になっていくだろう……」(165)) 子供のいないサム・ファザーズにとって、アイク少年は精神的な後継者なのである。

しかし、こうした2層的構造はその内部に矛盾した問題を含んでいる。つまり、白人少年アイクは自らの精神の深層にネイティブ・アメリカンの血を引くサム・ファザーズの教えを引き継ぐことになるのだが、歴史的に考えると白人はネイティブ・アメリカンの土地を収奪していった存在とも考えられるため、少年アイクが成長していくにつれて、白人である自己とネイティブ・アメリカンの血を引くサム・ファザーズから受け継いだ教えとの間にある矛盾に苦悩する可能性が高まるのだ。こうした矛盾点が本格的に展開されるのは、次の中編「熊」の第4節である。

<5. 「熊」>

「熊 The Bear」では、「昔の人たち」に引き続きアイクの狩猟体験が語られる。「熊」は内容的に前半(第1節から第3節まで)と後半(第4節と第5節)に分けられる。

まず、前半の第1節から第3節までで描かれているのは、アイクと伝説的な巨熊オールド・ベンとの関わりである。アイク少年は、銃や時計・羅針盤といった文明によって汚れた(tainted)道具を持たずに森の中に入っていくことで、オールド・ベンを目撃する(198-200)。その後、巨熊に対抗できる野性の強さを持つ獵犬ライオンが登場する。そして、アイクが16歳の時に、いよいよオールド・ベンとの狩猟物語も最終幕へと向かう。獵犬ライオンたちの活躍によって、ついにオールド・ベンは倒されるが、巨熊との闘いによって傷ついたライオンも死に、森の中に埋葬される。また、アイクの狩猟における師匠であったサム・ファザーズも、「家に帰らせてくれ Let me go home」との言葉を残して死んでいく(234)。

「熊」の前半部において描かれているのは、巨熊との対決とサム・ファザーズの死を通しての、サム・ファザーズによるアイク少年への教育の完成と修了である。「昔の人たち」の物語より始まった、サム・ファザーズを師匠としたアイク少年の森の中での狩猟体験は、オールド・ベンという伝説の巨熊との対決を通して最高潮に達し、さらに同時に、オールド・ベン、獵犬ライオン、師匠のサム・ファザーズが皆死ぬことによって終りとなる。この森の中での教育においてアイク少年が学んだものは、貴重なものの死と喪失だったのではないだろうか。「熊」において、オールド・ベンのいる野生の森はアイクの「大学 college」であり、サムはアイクの「教育役、師 mentor」とされている(201)。しかし、アイクの教育の場であった森、過去から受け継がれた「悠久の森 the timeless woods」(192)にしても、いずれは時間の流れの中において失われることが予想される。つまり、教育の完成・修了と共に喪失へと向かうのである。

「熊」を2層的構造の観点から見ると、表層が人為の世界であり、人種的には白人、時間的には現在時と位置付けられる。その一方で、深層は自然の世界であり、人種的には異人種、時間的には過去である。「熊」では、こうした人為の世界と深層の自然の世界との間のずれが描かれており、前半の第1節から第3節までは深層の自然の世界の意義と共に喪失の可能性が示唆され、後半の第4節では、人為が自然に対して加える罪悪の主題が、人種問題との絡みにおいて描かれている。

さて、「熊」の後半の第4節で述べられているのは、アイクが祖先ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンの黒人女性に対して犯した罪を知り、21歳の時に自らの農園相続権を放棄するに至る顛末である。アイクは過去の台帳の古びて「黄色くなったページ yellowed pages」(245)を見て、そこに記されたほとんど「判読できない indecipherable」(261)のような筆跡を解読しながら、過去の秘められた事実に対する推測を重ねていく。そして、ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンが黒人奴隷の女性に娘を産ませたうえに、さらにその娘とも近親相姦の罪を犯し、そのため、黒人奴隷の母親は川に投身自殺したことを知るのである(256)。ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンと黒人奴隷の娘との近親相姦の結果生まれたのが、「昔あった話」で登場したトミーズ・タールである。また、「火と暖炉」で登場したルーカス・ビーチャムはトミーズ・タールの息子であるから、ルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンの男系の血を引いた黒人なのだ。

この第4節を表層と深層の2層的構造の観点から考えてみると、表層はアイクの財産放棄という現在の行動であり、深層は祖先の白人が過去において犯した罪である。その罪は2通りあって、1つ目は、祖先のルーシャス・クインタス・キャロザーズ・マッキヤスリンが黒人女性との間に犯した近親相姦であり、また2つ目には、ネイティヴ・アメリカンの自然の土地を白人が金の力で買い取り収奪していったことである（「祖先の老キャロザーズ・マッキヤスリンが白人の金を用いて未開人から買い取った土地」(243)）。アイクは白人が過去において異人種に対して犯した罪を古い台帳の黄ばんだページに記された文字を解読することによって、つまり、過去との対話によって知り、それによって財産放棄という現在の行動を行ったのだ。また、読者の側も、それまでの連作の中に登場したトミーズ・タールやルーカス・ビーチャムといった黒人たちや、さらにはネイティヴ・アメリカンの血を引くサム・ファザーズによって表される自然の世界の隠れた背景を知らされて、新たな認識と読み直しを迫られることになる。

なお、ネイティヴ・アメリカンの自然の土地を白人が金の力で買収していったことは、アメリカの歴史において重要である。つまり、自然環境の捉え方についてのネイティヴ・アメリカンと白人との間の相違が表れてくるのだ。経済学者の宇沢弘文は、『社会的共通資本』において、人の生活や文化にとって必要な社会的共通資本を自然環境、社会的インフラストラクチャー、制度資本の3つの大きな範疇に分けて考える(ii)。そのうえで、自然環境の捉え方についてのネイティヴ・アメリカンと白人との考え方の相違の例として、ネイティヴ・アメリカンの或る酋長の言葉を紹介する。

「白人にとっては、大地は兄弟ではなく、敵である。一つの土地を征服しては、また次の土地へと向かってゆく。……白人は、自らの母親でも、大地でも、自らの兄弟でも、また空までも、羊や宝石と同じように、売ったり、買ったり、台無しにしてしまったりすることのできる『もの』としか考えていない。白人は、食欲に、大地を食いつくし、あとには荒涼たる砂漠だけしか残らない」(209)。

宇沢によると、ネイティブ・アメリカンの宗教であるシャーマニズムは、自然資源を持続的利用のために管理し、規制するためのメカニズムである(212)。他方、西欧においては、自然は人間にとっての手段、搾取可能な対象として捉えられ、「自然の手段化は、アダム・スミスの経済学によって、その極限の段階に入ってしまった」のであり、自然は経済的利益の追求のための手段となっていたのである(214)。宇沢の説を言い換えると、ネイティブ・アメリカンにおいては自然と人為の調和が目指されているが、西欧の白人文明においては、自然は人為によって侵され、搾取されてしまうものである。そしてアメリカ合衆国の歴史において、まさに自然は人為によって侵食されていたのであり、アイクはその歪みを感じ取ったのだ²。

「熊」の最後の第5節では、自然が白人の文明によって侵されていく様子が描かれていく。巨熊オールド・ベンとの闘いが終わってから2年後、「或るメンフィスの木材会社」(302)が森の伐木権を取得し、新しい材木仕上げ工場が建設されていく(303)。森は依然として「悠久の timeless」(308)という言葉で形容されてはいるものの、少しずつ確実に産業資本に侵食されていくのである。これを時間の観点で見ると、現在の時間(表層)が、悠久の過去(深層)を侵していくと考えることができるだろう。

なお、『行け、モーセ』の第6話「デルタの秋」と第7話「行け、モーセ」(長編全体と同一表題の短編)については、続論にて扱いたい。「デルタの秋」ではアイクの認識枠(世界観)の限界が指摘され、「行け、モーセ」ではビーチャム家の末裔の死にまつわる出来事が語られる。

【注】

1. 例えば、拙論「ミステリー小説としての『アブサロム、アブサロム!』—現在と過去との二層構造」『東京薬科大学研究紀要』16(2013):9-15を参照。
2. なお、『行け、モーセ』が出版されたのは1942年であるが、その20年後の1962年には、同じアメリカ合衆国においてレイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版されている。この本は殺虫剤などの化学物質の乱用を戒めた環境問題の古典であるが、とくに20世紀において人為の力が著しく増大して、自然の世界を変えてしまうに至ったという認識が背景にある。「とりわけ今世紀[20世紀]というわずかな時間の間において、1つの種—人類—が世界の性質を変えてしまうような著しい力を獲得したのである」(5)。20世紀における自然の大きな変化は、『行け、モーセ』の中では「デルタの秋」で描かれる。

【引用文献】

Carson Rachel. *Silent Spring*. 1962. Boston: Mariner Books, 2002.

Faulkner, William. *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage International, 1990.

Sederberg, Nancy B. "‘A Momentary Anesthesia of the Heart’: A Study of the Comic Elements in Faulkner’s *Go Down Moses*." *Faulkner and Humor: Faulkner and Yoknapatawpha, 1984*. Ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1986. 79-96.

宇沢弘文『社会的共通資本』岩波書店、2001年。